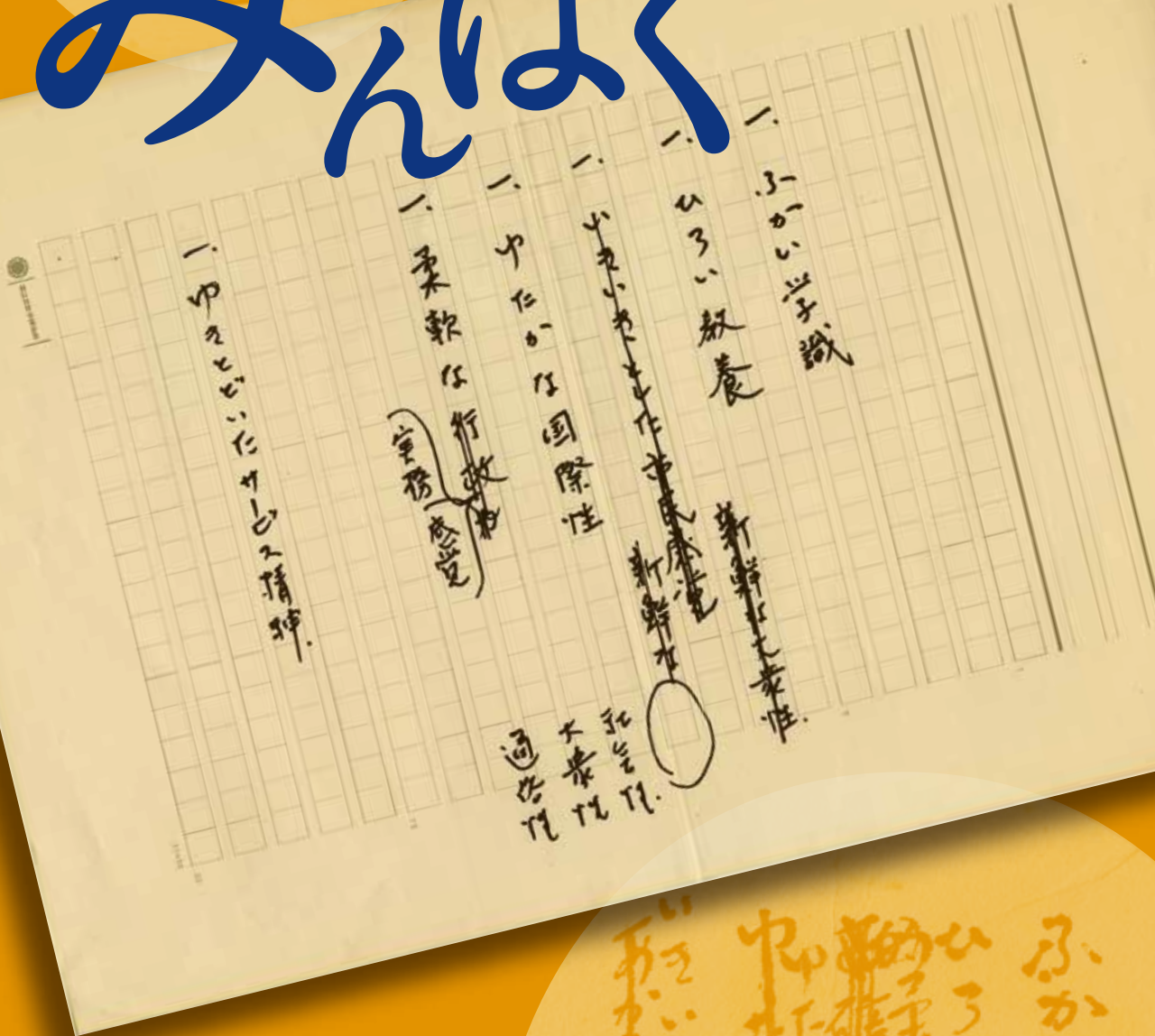


月刊

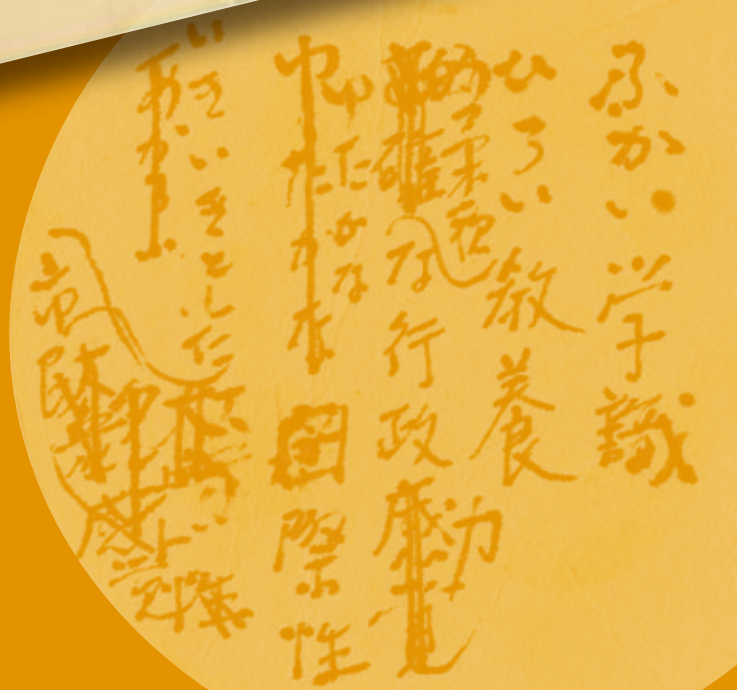
2010

10
月号

みんぱく



私生活
大衆性
通俗性



特集 梅棹忠夫とみんぱく

たえざるイノベーション 中牧 弘允

みんぱくの研究理念 中牧 弘允

博物館の思想 久保 正敏

梅棹忠夫の言語ポリシー 庄司 博史

市民と博物館 朝倉 敏夫

再録 — 『月刊みんぱく』創刊のことば 梅棹忠夫

うめさおただお

今号の特集では、去る七月に逝去された梅棹忠夫初代館長が民博に託した思いを振り返る。

表紙に掲げたのは、一九七五年頃、梅棹さんが、館員に向けての民博の理念を

ホテルのバーでメモ書きしたコースター裏と、後にそれを推敲した原稿用紙。

理念のひとつに挙げられている市民感覚を大切に思う思いが、本誌の創刊につながった。

そのねらいは、ここに再録した一九七七年〇月五日刊行の創刊号冒頭に示されている。

ここに『月刊みんぱく』の創刊号をおとどけする。

「みんぱく」とは何のことかと、一瞬不審の念をもたれた方もあろうかとおもつ。「みんぱく」は「民博」である。

国立民族学博物館の略称ないしは愛称である。そしてこの『月刊みんぱく』はその国立民族学博物館の広報誌である。「みんぱく」というよび方は、すでに一般に定着しているとはいいがたいが、この博物館を少ししめる存在と

みていただくために、あえて四角ばらぬ愛称「みんぱく」を、この雑誌の名に採用したのである。

「みんぱく」つまり国立民族学博物館は、この秋に開館を

予定されているあたらしい博物館である。大阪府吹田市千里の日本万国博覧会記念公園のなかに、現在建設中である。まもなくできあがって、十一月十七日から一般に公開される。

民族学（文化人類学）というのは、世界の諸民族の社会と文化を研究する学問である。したがって民族学博物館というのは、世界の諸民族の社会と文化に関する資料を収集、保管、展示する博物館である。ヨーロッパやアメリカでは、この種の博物館はむかしから各地に存在するが、日本にはいままでひとつもなかった。民族学関係者たちの四〇年来の悲願がようやく実をむすんで、こんど、この国立民族学博物館の開設が実現することになったのである。

現代の世界は、かつてない国際化の時代をむかえて、諸民族間の接触と交流はますます活発になろうとしている。

民族学（文化人類学）というのは、世界の諸民族の社会と文化を研究する学問である。したがって民族学博物館というのは、世界の諸民族の社会と文化に関する資料を収集、保管、展示する博物館である。ヨーロッパやアメリカでは、この種の博物館はむかしから各地に存在するが、日本にはいままでひとつもなかった。民族学関係者たちの四〇年来の悲願がようやく実をむすんで、こんど、この国立民族学博物館の開設が実現することになったのである。

そのねらいは、ここに再録した一九七七年〇月五日刊行の創刊号冒頭に示されている。

そういう時代にあつては、国民の一人ひとり、世界の諸民族の社会と文化についての、具体的に正確な認識をもつことが、きわめて必要となつてきている。国立民族学博物館は、まさにそのためにつくられたものである。それは、国際理解のための、世界にむかつてひろく文化の窓である。

国立民族学博物館は、このように、市民の教養のための施設であるが、いっぽうでは、国立大学共同利用機関とよばれるところの研究機関のひとつである。それは、いかめしく「国立」の字を冠し、また「民族学」と学問の名を名のつている。市民の一般的な感覚からは、日常生活には縁どおい存在と感じられて、敬遠されるおそれがないではない。それだけに、われわれ関係者としては、この施設を市民に身ぢかなものとしてしたしんでもらうために、できるかぎりの活発な広報努力をほらうべきである。

この小雑誌も、そのような自戒的努力のひとつとかがえていただきたい。

ささやかなひとつの施設にも、しつていただきたいこと、みてもらいたいものがすくなくない。また、ときどきのニュースもある。この雑誌は、この博物館をひろく紹介するとともに、刻々のうごきの情報をみなさんにおとどけするものである。この小雑誌が、市民のみなさんにこの博物館に関心をもつていただき、いっそう有効にそれを利用していただくためのきつかけになることができれば、わたしどものよろこび、これにすぎるものはない。

ささやかなひとつの施設にも、しつていただきたいこと、みてもらいたいものがすくなくない。また、ときどきのニュースもある。この雑誌は、この博物館をひろく紹介するとともに、刻々のうごきの情報をみなさんにおとどけするものである。この小雑誌が、市民のみなさんにこの博物館に関心をもつていただき、いっそう有効にそれを利用していただくためのきつかけになることができれば、わたしどものよろこび、これにすぎるものはない。

ささやかなひとつの施設にも、しつていただきたいこと、みてもらいたいものがすくなくない。また、ときどきのニュースもある。この雑誌は、この博物館をひろく紹介するとともに、刻々のうごきの情報をみなさんにおとどけするものである。この小雑誌が、市民のみなさんにこの博物館に関心をもつていただき、いっそう有効にそれを利用していただくためのきつかけになることができれば、わたしどものよろこび、これにすぎるものはない。

1 再録
『月刊みんぱく』創刊のことば 梅棹 忠夫

特集 梅棹忠夫とみんぱく

- 3 たえざるイノベーション 中牧 弘允
- 4 みんぱくの研究理念 中牧 弘允
- 5 博物館の思想 久保 正敏
- 7 梅棹忠夫の言語ポリシー 庄司 博史
- 8 市民と博物館 朝倉 敏夫

10 研究フォーラム
科学映像をめぐるフォーラム
総研大レクチャー「科学映像の制作理論と制作」
大森 康宏

- 12 みんぱく Information
- 14 地球ミュージアム紀行
告発する博物館——水俣病歴史考証館 平井 京之介
- 15 みんぱく 私の逸品
ファイアの羽根 ビーター・マシウス
- 16 散策と思索の径
博物館と「さわる」 小山 修三
- 18 多文化をささえる人びと
多文化の街の多言語メディア——ニューコム 中野 克彦
- 20 歳時世相編
イタリアの「熱い秋」 宇田川 妙子
- 22 フィールドで考える
「出張」にでかける地方の神さま 竹村 嘉晃
- 24 次号予告・編集後記

月刊
みんぱく

10月号目次

博物館というものは、一瞬たりとも油断しちゃだめなんですよ。いつでも時代の最先端を走るというつもりで、とくにさまざまな装置群のイノベーション（刷新）をつねにかんがえていなければならぬ。それをおこたりますと、たちまちデッド・ミュージアムになるんです。……これからゆめゆめ油断めさるな。
 『月刊みんぱく』一九九三年六月号



たえざるイノベーション

なかまき ひろちか
 中牧 弘充
 民博 民族文化研究部

梅棹忠夫初代館長が二〇一〇年七月三日、ご家族にみまもられて永眠した。梅棹さんがみんぱくにそそいだ情熱とエネルギーは筆舌に尽くしがたいものがある。「梅棹あつてのみんぱく、みんぱくあつての梅棹」といっても過言ではない後半生だった。まさにみんぱくの顔であり、名のとったブランドでもあった。

館員にとってはモデルであり、かつ目標でもあった。到達したい存在でありながら、それでいて身近な実在でもあった。知的生産の技術者として、卓越した研究経営者として、また「あかるいペシミスト」の思想家として、独特の境地をひらきつづけた。一九八六年に視力をほぼ喪失したあとも「みえないの知的生産」にはげみ、「未来に責任をもつインテリゲンチア」をつらぬいた。

「遺言状」
 その梅棹さんがみんぱくに「遺言状」をのこしている。館長を退任するときの記念講演で、右頁のように述べている。

たえざるイノベーションはみんぱくのかくれたモットーであり、最前線をきりひらくことはいわずもがなのコンセンサスである。もしみんぱくカラーなるものがあるとすれば、それは初代館長から刷り込まれた貴重な遺産であるにちがいない。

建館の精神

退官する館長はつづけて、つぎのようにも言っている。「この二冊（『研究経営論』と『情報管理論』）がわたしの遺言状です。（笑）……これらはいわば創業の精神、建館の精神として、どうぞひきついでいただきたいと念願します。」

具体的実践に裏づけられた研究経営・情報管理論をみんぱくは創設の初期段階からもっていた。これを死蔵してはデッド・ミュージアムへの道をあゆみかねない。「ゆめゆめ油断めさるな」との声が聞こえてきそうである。



開館当時の民博全景

特集 梅棹忠夫とみんぱく



『情報管理論』
 (岩波書店 1990年)



『研究経営論』
 (岩波書店 1989年)

ご先祖さまになろう

このように梅棹さんは折にふれ機会をとらえて館員の士気を鼓舞してきた。それは一九七四年六月一〇日、みんぱくの発足のさい、「ご先祖さまになろう」と式辞で教職員によびかけたことからはじまる。そこでは、「初代たち」がえらかったからだと感謝されるような存在でありたいと、柳田國男の『先祖の話』をひいて述べている。本特集では、偉大な「ご先祖さま」となった梅棹忠夫のことばに言及し、そのゆたかな含蓄をあらためて今後の糧にしたいとおもう。

みんなはくの研究理念

なかまき ひろちか
中牧 弘允 民博民族文化研究部

業績をきそ

みんなはくの研究者がたえず胆に銘じている梅棹さんの名言がある。研究の自由はあるが、研究をしない自由はない。つまり、研究の自由は保証するが、研究を公務とするからには、業績をださないことはみとめないという趣旨である。競争原理を導入し、研究者をきそわせ、給料を原稿枚数で割って、業績ランキングをこころみたら一九八九年頃の発言である。冷徹に聞こえるが、真のねらいは、研究者の内発的な意欲をかきたてることにあった。研究者ごとに刊行物を図書室の業績棚にならべ、館の内外に研究業績を開示したのも、研究経営・情報管理の卓抜なる発想に基づいていた。『民博通信』の「館員の刊行物」には三カ月ごとに自己申告に基づく業績が掲載された。誰がどれほどの研究成果をあげているか、一目瞭然だった。

一流をめざす

ディシプリンをこえるという指導もあった。それは専門分野に閉じこもるなという警告であると同時に、共同研究やシンポジウムでの指針でもあった。専門をこえて議論するからこそ意義があるのであって、仲良しクラブをいましてゆるいものでもあった。その意味で、谷口財団の支援を受け毎年開かれた民族学部門と文学部門の国際シンポジウム、特に後者はディシプリンをこえた学術交流の場であった。また谷口シンポジウムの実行委員長は部門を問わず、その運営と出版に責任をもち、学際的・国際的なデビュー

梅棹流の一流指向（嗜好）は博物館の建物からレストラにまでおよんだ。博物館は上等でないといかん。安物でやったらだめですと毛利正夫氏（日本博物館協会専務理事）との対談で述べている。みんなはくの研究者にたいしては教授になったらグリーンに乗れとすすめていた。やせがまんをしてでもグリーンに乗れと指導されたものである。

挑発の能手

梅棹さんは挑発の能手だった。『知的生産の技術』（岩波新書）でカード（B6の京大カード）を一万枚発注せよとけしかけるくだりは、その典型である。人文系では異例の大型コンピュータの導入に際し、目の前に巨大なコンピュータができたなら、だれでも必死になってこれをつかわないらんと情報科学の専門家である中山和彦氏（筑波大学教授）を前に館長対談でかたっていた。館員にはコンピュータは鉛筆と消しゴムみたいなものやおしえてくれたが、ワープロが登場するまで、わたしにはその意味が理解できなかった。

供給が必要をかきたてるというのも梅棹流の挑発にほかならなかった。常識をひっくりかえす逆転の発想だが、真実の一面を見事についている。大型コンピュータもみんなよく自体も、いくらニーズを聞きまわったところで、必要性はでてこない。むしろやる、といつ決意ひきまわられて、ニーズが湧きおこってくる中山氏を相手に指摘している。「梅棹語録」は精神主義ではないが、精神性、思想性に富んでいる。それは知的生産とわかちがたくむすびつき、かつ人間性の機微にふれ、ときに意欲をかきたてる効能をもっている。しかも、老荘ほどニヒルでないところが絶妙である。語録の発掘も意外な発見をもたらすかもしれない。



谷口国際シンポジウム・文学部門における討論の様子。冒頭、梅棹さんが基調講演をおこなうのが慣例であった。1983年

をはたす絶好の機会となった。

民族学・文化人類学の専門分野ではみんなはくは「一・五流」をめざすと梅棢館長は公言した。木田宏氏（文部事務次官）との館長対談で、すくなくともわたしは館長をやっているあいだに、一流とまではゆかなくても、一・五流くらいにまではもってゆきたいと述べている。二流、三流に甘んじることなく、世界の一流をめざして、当面は「一・五流」という現実的な目標を設定したのである。このレトリックが文部省を説得するときには有効だったかどうかは知らない。だが、館員をふるいたたせる効果は絶大だった。しかも、二世紀初頭に一流になるための地盤をつくっておきたいとまで言い切っている。

博物館の思想

久保 正敏

民博文化資源研究センター

研究と展示の一貫性

梅棢さんの考えたみんなはくの根本のひとつは、「研究と展示の一貫性」である。みんなはくが学芸員を置かない大学共同利用機関として設置されたのも、モノを扱う学芸員と研究者を分離しない方針からである。収集に関しては、収集、展示するのは、宝物ではなく日常生活に関連するがらくたに見える学術研究資料とした。これが収集の基本方針となった。研究者に対しては、モノのもつがらくた性、それを作りだしてきた人間性のいやらしさ、両方が感覚的に分らないとダメである。博物館で生のモノに触れるから、人間文化に対する感覚が鋭くなる、眼力ができる。だから研究者としても優秀になることを期待した。展示についてもモノのインパクトを与える教育機関でもありたいと述べた。つまり、モノを核とした研究から展示までの一貫性である。展示は研究者による研究業績であり、展示ができるまでのプロセスも論文にしないとい、研究者には耳の痛い激励も頂戴したものである。

構造展示

梅棢さんは、展示は単にモノを並べるだけのものではなく、作る側の世界観を編集して提示したものであり、一種の編集学であるから展示学が成立すると考え、展示学会の創設にも尽力された。展示では、文化を相対的にとらえ、ひとつの価値を押しつけないことを基本とした。そして、個々の文化が個別に

1974



創設準備室で資料に目を通す



バラ園奥に広がる民博建設予定地



発足後の研究部会議

1976



定礎式後、建設現場を確認する



建設がすすむ民博

1977



開館式典



新しくなった言語展示でも中国語や韓国語が併置されている

日も掲げられている。今となって、いわゆる「現実派」の立場から、「外国人にせめて英語でも情報提供したい」という意見がたかまり、いくつかのコーナーでは英語表示が見られるようになった。しかし、英語表示はやや

英語だけを特別扱いしない
梅棹さんには、言語ポリシーがあった。これは、みんぱくの来館者にもはっきり見える。いや、「見えない」といったほうが、正しいのかもしれない。今やどの博物館でもあって当たり前前の、大げさな英語による解説がみあたらないのである。みんぱくの展示場で英語を全面に出すことに、梅棹さんは反対であった。それは外国語のひとつである英語だけを特別扱いしないという固い信念からきていた。国家機関としてもおかしいし、民族や文化を平等にあつかおうとする文化人類学の観点からも許容できないという主張であった。そのかわり採用したのがユネスコ常用語八言語である。各展示場名にかぎられ、たいした情報量はないが、国際性と平等性の象徴として、その後採用する言語は変化しつつも、今

梅棹忠夫の言語ポリシー

しょうじ ひろし 庄司 博史 民博民族社会研究部

遠慮しがちだし、今回全面改装された言語展示コーナーにみられるように、英語表示にはほぼ中国語や韓国語が併置されるところに、梅棹さんの信念はいく分ひきつがれている。



左は重野茂氏

モノから情報へ
梅棹さんには、博物館はモノを集めるよりは広く情報を集めるところ、一種のアーカイブズの役目をもつという認識があった。そうして集めた情報を引き出すことが、「知的生産の技術」であり、そのためにコンピューターをいち早く導入したのである。中牧弘允氏の稿にもある通り、梅棹さんは、人文系にも使いやすい技術開発を求め、人文系のニーズ開発を目指した。実際、その後の情報技術がニーズ開発の方向で進んできたのを見ると、情報産業に関する梅棹さんの先見性が見て取れる。展示におけるコンピューター活用は、ビデオテーク開発

日本語の致命的欠陥
言語学者ではないから、といつもことわりがきをつけながらも、言語についての大胆な発言をしていた梅棹さんが、決して場当たりのなおもいつきなどではなく、言語そのものについての深い洞察と合理主義につらぬかれていた。そんな梅棹さんにとって耐えがたいのが、漢字かな混じり表記の無原則さであった。送りがなはゆらぎ、漢字の読み方も定まらない。とても文明語といえないというのだ。その解決策として漢字の訓読みはひらき、音読み漢字のみをもちいた。冗長な印象はあるが、なれるとすんなり頭にはいった。そして何よりも、電子媒体が可能になった今日、この非合理性は日本語の致命的な欠陥にみえた。ゆらぎ送りがな、読み方ではまともな検索もできないし、漢字のおかぎでメモリーは半減するというのが口ぐせだった。誰にでもよめ、習得に時間のかからない表記法、読み書きの民主化へのあこがれは、梅棹さんのひらがな主義、そしてローマ字主義へとつながった。



100万人目の入館者を迎える

また、民族学とは、価値という人間精神に内在する体系的なものを研究する学問である。そうした価値の客観的研究を数学でできないか。そのために「コンピューターを活用したいと希望した。手回し計算機と格闘し、オタマジヤクシを材料に社会性の数理モデルを博士論文とした梅棹さんの思いだったのだろう。しかし、それは、今でもなかなか実現が難しい、情報学への宿題である。

日本語の解放
とにかく、梅棹さんはことば好きであった。世界各地のことばに並々ならぬ興味をもち、学んでは実践していた。



入館入口にて来客を迎える



ビデオテークについて説明する梅棹さん。1979年

に發揮された。一から多への放送とは逆に、多数の番組から一人が選択するシステムを発売した。現在のネット世界で当たり前となったビデオオンデマンド（VOD）の先駆である。そし



第1回みんぱくゼミナールでの挨拶



大壺・深鉢を制作した陶芸家中村豊氏と



還暦記念シンポジウム



アイヌ民家チセ建築に先立つ儀礼カクムイノミ。左は重野茂氏

「言語学者ではない」学者であれだけの実践者をわたしは知らない。しかし、公的な場においては、現地主義を尊重していた。それは、日本では英米人との会談で相手にあわせて英語を話す必要はないという主張にもみえた。相手に通訳をつけたり、英語ではなしてあげるの単なる好意であって、日本語ができないなら、通訳をつれてくるのが筋だというのが。しかし梅棹さんの周囲にあつまる外国人はほとんどが日本語の達人であった。

かといって梅棹さんは、決して日本語を押しつけようとする日本語至上主義者ではなかった。日本語が海外に普及することはすなわに喜んだが、日本文化の優秀性の証しとも、その威勢の拡張手段ともみていなかった。むしろ日本経済の勢いによって身近な表現媒体が広がるのを個人的に歓迎しただけだ。しかし、梅棹さんにとって日本語はそのためには欠陥が多すぎた。先にのべた漢字かな混じりの複雑さ、そして目標とすべき標準語規範の不在であった。むしろ梅棹さんは、国際語への飛躍に伴いこのような日本語の不合理さがそりおとされることを望んでいたようだ。

これに絡んで梅棹さんがよく口にしていた「おぞましい日本語」論がある。日本語を「解放」し、外国人に日本語を使ってもらうことは、日本語を日本人の独占物とはみなさないことである。もはや日本人の魂など神秘的であいまいな表現でつづんでしまうことは許されない。むしろ外国人のはなすさまざまな日本語になれ、受け入れることであった。梅棹さんは表記法だけではなく、簡潔でわかりやすい表現をことのほか愛した。簡単な内容をレトリックで飾ってみたり、論理的弱さをごまかそうとするのは恥じた。文化人類学者には耳の痛い話である。この梅棹さんの切れのいい文体の伝統は、今もみんばくではひそかに引き継がれている。

市民と博物館

朝倉敏夫 民博文化資源研究センター

『月刊みんばく』『館長対談』

みんばくと市民をつなぐ、それが『月刊みんばく』のおびた使命だった。開館までにやらなければならぬもうひとつの仕事は、広報普及誌の発行であった。こちらのほうは月刊のものをかかんがえた。市民のための博物館を標榜する以上は、この種の広報誌はかならずださなければならぬとかがんがえていた。このことばどおり一九七七年一月の開館に先だって、一〇月に『月刊みんばく』創刊号が刊行された。その目玉は「館長対談」であった。「館長対談」は、梅棹さんがホストとして各界の識者をゲストにむかえ、博物館または民族学に関連するさまざまな話題についてはなしかる知的好奇心あふれた場であった。創刊号から一九九三年三月号まで一八二回つづいた。これにはふたつのしかけが用意された。ひとつは、対談という形式によって、一般の民族誌



「館長対談」から誕生した単行本出版記念に、サインをする梅棹さん

すから、税金をいかに有効につかっているか、その市民の声によってさせられるわけです。これほどわかりやすく、梅棹さんが考えた市民とみんばくとの関係を伝えることばはない。

国立民族学博物館友の会

もうひとつ、みんばくと市民をむすぶ使命をうけ発足したのが、国立民族学博物館友の会である。「友の会」の会員は、みんばくの活動を支援するとともに、みんばくから有用な情報の提供をうける。そのような相互作用を通じて、みんばくのいっそう有効な利用をはかろうという趣旨のものである。

国立の博物館であるみんばくは、市民に対するサービスという点では、くふうが必要だった。世界の博物館を見て回った梅棹さんは、どの国でも、政府と市民とのあいだに、かならずさういふ中間に立つ媒介機構が必要になってくる、こういう組織はどうも、文明的な意味で、どうしても必要なんじゃないかなと、後に独立して財団法人千里文化財団になる財団法人民族学振興会千里事務局を開設する。そして市民に対するサービス業務のひとつとして「友の会」を組織した。民博が市民のあいだにしっかりと根をおろして、その機能をじゅうぶんにはたすには、「友の会」がさかになるほかないのである。そして、二五万人という会員数を指した。

「おもろいでっせ。見にきなはれ」というパブリシティもこっちでやる。梅棹さんの思いを代弁した小松左京氏のことばである。その「こっちでやる」ために作られたのが「友の会」である。「友の会」のみなさんにサポーターとしての存在感を感じていただき、市民の皆さんに民博のおもしろさを伝える『月刊みんばく』でありたい。

のもつ平板さ、無味乾燥さを脱し、平易でしなやかな形で、世界の諸民族の社会と文化についての知識を市民に提供した。もうひとつは、あたらしい時代をみすえたテーマを定めてゲストをむかえることによって、それらが一冊の本としてまとめられた。その数は一四冊にもおよぶ。これら『月刊みんばく』から生まれた本の一覧は、本誌の「三〇巻記念号」(二〇〇六年二月号)に掲載されている。

「生ける験あり」

「館長対談」の第一回のゲストは、小松左京氏で、タイトルは「市民と博物館」である。われわれの博物館も入館料をとっていますが、それ以外の博物館の財政がささげられるというところはない。サポートといっても、別のサポートがあるわけです。入館した人たちが、ここで十分に、知的な享樂的な生きがいを見いだす。この博物館を見て、やはり「生ける験あり」とおもってください。人がたくさん来てきたら、それは民主主義のメカニズムをつうじてちゃんと行政にも反映するはずだ、と確信しているわけです。このことが博物館を前についでにみんばくにおおきい力になってくる。税金をつかうので



第1回目のゲストは、作家の小松左京氏であった



千里文化財団の出発を祝う式典



趣味の切手収集



研究公演「狩人の夢」レセプションでデジタル笛を吹く



開館10周年記念行事のひとつ「みんばくチャレンジ・クイズ」会場



特別展示館完成を前に



梅棹資料室にて



科学映像をめぐるフォーラム

総研大レクチャー「科学映像の制作理論と制作」

おもり やすひろ
大森 康宏

立命館大学映像学部教授
民博 名誉教授

本年2月号の特集でも紹介したように、民博も一翼をになう総研大は、自然科学系の専攻科も数多く所属し、自然科学と人文社会科学の融合を目指している。研究手段としてだけでなく研究広報の手段としての科学映像の重要性が高まっているのを踏まえ、7年にわたり総研大で映像制作の講義を実施してきた。そのなかで、科学研究へのあらたな展望が見えてきた。

手近となった映像制作

写真や映像など視覚メディアは、科学者自身にとっての研究素材であり、かつ、論文と同様に研究成果を公表し、研究活動を国民に理解してもらうのに有効な媒体である。さらに、情報量の多い映像には、その撮影者や制作者が気づかなかつた情報も記録されている点で、他分野にとっての研究資料、科学研究活動を後世に残す記録資料としての役割ももつ。

これまで、映像の制作は、撮影や編集の技術をもつ専門家にまかされていた。しかし、近年、フィルムに代わるビデオテープやコンピュータの出現、デジタル化の進展にともない、撮影機器や編集機器の小形化と低廉化が進み、すべての分野の研究者が自ら科学映像を制作することが可能となった。そこで、若い研究者が自在に映像を制作できるように支援するため、映像制作の心得があるボランティアの院生数人とともに、映像の技術や表現理論の講義と実習を組み合わせた大学院生向けのコースを自主的に二〇〇一年夏に立ち上げた。

信州の高原で

長野県の飯綱高原を実施場所に選び、二年間にわたり地元伝統芸能やモノ作り技法などを撮影して映像表現の研究を進めた。そのなかで、研究者仲間だけでなく、科学

方にさまざまな新展開を見せた。

まず、映像は制作者のためだけにあるのではない、という基本原理である。これを充分理解していないと、自我流の撮影・編集手法から抜け出せず、独りよがりな作品となることが多いのだ。これが理解できると、撮影時のカメラ目線、撮られる側の文化背景や社会背景などにも配慮するカメラワーク、そして制作された映像を見る視聴者を考えることができるようになる。そうして初めて、撮影者である研究者は、撮影する自分の文化背景と撮る対象に関する問題を提起し、試行錯誤のなかでテーマを設定できる。

この基本原理を体得するうえで、合宿形式で議論しながら撮影から編集までを一貫することが極めて重要である。同一の撮影対象者に対して複数の研究者がそれぞれ制作



編集作業 (2008年)



環境保全研究所で撮影 (2008年)

研究を社会に知ってもらうサイエンス・コミュニケーションの重要性が論じられ、地元住民にも制作した映像を公表し、ともに議論する場を設けることになった。また、映像を視聴分析する能力である映像リテラシーは、人文社会科学、自然科学ともに必要であり、両分野の人材を同じ場で養成することは、文理融合の観点からも望ましいと議論が進んだ。これは総研大の理念にもかなうことから、総研大の教育研究事業「総研大レクチャー」として開設を申請した。その結果、二〇〇三年度から、人文社会科学と自然科学、両分野の若手研究者を対象に五日間のコース「科学映像の制作理論と制作」が開設された。

人を描く

初めの数年間は、飯綱高原周辺で、そば

した映像を見て議論することで、同一人物をさまざまな視点からとらえた場合の画面構成や内容の違い、すなわち、撮影者の眼差しの違いを学ぶ。さらに、被撮影者を迎えた作品上映会では、映像の技術面、画面構成、解説などに関する議論を通じて、制作者の伝えたいメッセージ、ことさらに意図せずとも自然と伝達されるメッセージなど、映像のもつ限らない力を理解することになる。

合宿のうち毎年秋に実施してきた完成作品の上映会は、専門分野を超え、またときに留学生も交えるなかで文化を超えた議論の場として重要視してきた。特に異文化からの視点は、日本文化のなかで常識とされてきた見方に反省を迫る絶好の機会となった。

このように、「科学映像の制作理論と制作」レクチャーは、撮る側、撮られる側、観る側の三者が集い、それぞれの視点の違いを互いに気付き、それに基づいて議論する、フォーラムとして成長を続けてきた。現地合宿形式による総研大レクチャーは二〇〇九年度でいったん終了したが、今後もあらたな形での展開が期待される。

レクチャーで制作したいくつかの作品は、折に触れて民博でも一般公開されてきたし、来春には、立命館大学創立二一〇周年記念事業・映像学部主催「科学映像祭」でも上映される予定である。

打ち、カゴ作り、陶器作り、炭焼き、などの手仕事に携わる人びとを対象に、三人から四人のグループにわけて各自の撮影視点からそれぞれの仕事と技術を描く五分程度の作品を制作した。その過程で、仕事や技術だけでなく、それをこなす人の仕事観や人生をも描く民族誌映画の手法は、仕事の背景となる社会状況を表現するうえで重要であり、しばしば市民から遠いブラックボックスとなりがちな巨大科学をより身近なものにとらえてもらうためにも、自然科学研究をになう人を描く手法は役立つのではないかと議論が進み、自然科学研究者も撮影の対象とすることとなった。

そこで二〇〇六年度からは、モノ作りや教育・福祉関係の現場に加えて、野辺山天文台、筑波の高エネルギー加速器研究機構、長野県環境保全研究所、飯綱高原環境保全研究所、戸隠化石博物館など自然科学関係施設を訪問し、研究者の協力をえながら活動と生活の様子を対象に映像を制作してきた。

異なる眼差し

こうした七年以上にわたる総研大レクチャーには、延べ一五〇人以上の大学院生、大学教員、関係研究者、一般の映像制作者が参加した。その多くが、映像技術の向上もさることながら、映像記録に対する考え

■関連イベント

「地球おはなし村によるワークショップとラムの演奏」
実施日 10月23日(土)
時間 12時～13時
場所 特別展示館 エントランス前広場
(雨天の場合、本館エントランスホール)

「ギャラリートーク」
実施日 10月23日(土)
時間 14時～15時
場所 特別展示館

国際シンポジウム
「エル・アナツイの世界」(仮)
実施日 10月30日(土)
時間 13時30分～16時30分(開場13時)
会場 講堂
定員 450名
※参加無料、申込不要
お問い合わせ
研究協力課国際協力係
電話 06-6878-8235
(平日9時～17時)

※当日10時から会場入口にて整理券配付
※参加無料、申込不要
お問い合わせ
広報企画室企画連携係
電話 06-6878-8210
(平日9時～17時)

●アメリカ展示・オセアニア展示が新しくなります。その作業のため閉鎖になります。
期間 11月25日(木)～平成23年3月15日(火)まで

みんなくラジオ「世界を語る」
みんなくの研究のお話をラジオでもお楽しみいただけます。
ラジオ大阪(1314kHz)
毎週水曜日 23時30分から24時

※詳細については、みんなくホームページをご覧ください。

特別展

「彫刻家エル・アナツイのアフリカ

——アートと文化をめぐる旅——

ガーナ生まれでナイジェリア在住のエル・アナツイは、現代アフリカを代表する彫刻家です。木の彫刻や廃品を使った織物の作品で知られています。本展では、アナツイの作品とその文化的な背景をなぞっていきます。



「ピーク」(錫、銅線、2010年、作家蔵)

会期 12月7日(火)まで
会場 特別展示館

企画展

「アジアの境界を越えて」

人間文化研究機構の連携研究「ユーラシアと日本」での議論をふまえ、東アジアの古代と近現代を対照して、境界やそれを越えることの意味を考えます。
会期 10月14日(木)～12月7日(火)
会場 本館展示場内

みんなく映画会/みんなくワールドシネマ
「トゥル・ヌーン——イワノビッチの村」
日時 11月3日(水・祝)
時間 13時30分～16時(開場13時)
会場 講堂
定員 450名

みんなくセミナー

会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13時30分～15時(13時開場)
定員 450名(当日先着順)

参加費 無料

※展示をご覧になる方は観覧料が必要です。

第389回 10月16日(土)

「特別展関連」

西アフリカ——アートと歴史の交差点で
講師 竹沢尚一郎(先端人類科学研究部教授)



「父と子」(木、金属、彩色、1991年、作家蔵)

エル・アナツイは、ガーナ生まれ、ナイジェリアで活躍する、世界的な現代美術のアーティストです。彼の作品は、どのような歴史的・文化的背景から生まれ、それからどのように飛翔しているのでしょうか。彼の作品をより深く理解するために、お話しします。

第390回 11月20日(土)

「特別展関連」

アフリカの王様たちは今——ナイジェリアの政治と文化
講師 松本尚之(横浜国立大学人間科学部准教授)



アフリカでは現在、王権をめぐる様々な現象が起きています。近代国家と伝統王権が並び立つ状況があり、元来王制を支持してきた社会にも王が誕生しています。さらに王たちは、時には外国人をも首長に任命しています。この講演では、ナイジェリアのイボ社会を例に、今日のアフリカで王位や首長位が持つ意味を考えます。

友の会

友の会講演会

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室
定員 96名(当日先着順、会員証提示)

第389回 11月6日(土)

レヴィイストロースは20世紀に何をもたらしたか
講師 竹沢尚一郎(先端人類科学研究部教授)

時間 ●14時～15時30分(13時30分開場)
※講演会終了後、懇談会があります。

レヴィイストロースは20世紀最大の知識人のひとりといわれています。彼の影響は、人類学はもちろん、哲学、思想史、精神分析、社会学など、さまざまな分野に及んでいます。彼の影響がそれほどひろがった理由は何か、を考えてみましょう。

第390回 12月4日(土)

マヤの暦について——2012年まであと1年
講師 八杉佳穂(民族文化研究部教授)

時間 ●14時～15時30分(13時30分開場)
※講演会終了後、懇談会があります。

マヤの長期暦では2012年の暮れに大きな周期が終わりを迎えます。世間ではそれが世界の終末思想と結びつけられているようですが、本当にこの世界は終わってしまうのでしょうか。複雑なマヤ暦を読み解きながら考えていきましょう。

「1000人で音楽をする日」参加者募集中!

東南アジア各地の音楽を調査したホセ・マセタ(フィリピンの現代作曲家)は、音楽の本来的意味と東南アジア固有の音楽のアイデアを出発点として新しい音楽を作ろうとしました。万博公園の竹や木を切っただけのシンプルな楽器と人間の声でその新しい音楽「ウドロ・ウドロ」を演奏します。西洋音楽のシステムに慣れている私たちの認識が変わるはずですよ。たくさんの方のご参加をお待ちしています。1000人の音で「太陽の塔」をふるわせましょう。

日時 ●10月23日(土) 13時(雨天中止)
会場 ●万博記念公園自然文化園お祭り広場
参加費 ●無料(自然文化園入園料が必要です)

国立民族学博物館
ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

ミュージアム・ショップでは、先日亡くなられた初代館長・梅棹忠夫先生の著作コーナーを拡張しております。現在も流通する書籍はもちろんのこと、一般書店では入手のむずかしい著書もとりそろえています。梅棹先生が、みんなくのコンセプトや創設のあらましを綴った「みんなく早わかり」(525円)や、昨年刊行された「梅棹忠夫著作目録(国立民族学博物館調査報告86)」(3,192円)などもございます。通信販売も承ります。お問い合わせはミュージアム・ショップまで。



告発する博物館 ——水俣病歴史考証館

ひら い きょうのすけ
平井 京之介 民博 民族文化研究部



水俣病歴史考証館

水俣病とは何か。伝染するのだろうか。水俣湾の魚を食べても大丈夫か。

現在でもこれだけテレビや新聞を賑わせていながら、水俣病について正確な知識をもつ人は少ない。和解のプロセスが進む一方で、いまだに差別や偏見がある。

NGOの博物館

水俣病歴史考証館は、展示を通して、水俣病の歴史と教訓を伝えることに取り組んでいる。運営するのは、財団法人水俣病センター相思社。水俣病患者の生活支援と、水俣病事件の調査や教育普及活動をおこなうNGOだ。

告発する展示

病気や差別、運動がテーマだけに、写真と解説パネルが中心で、モノによる展示は少ない。しかし、以下の四点は必見である。水俣病の原因を突き止めた実験で、実際に使われていた「ネコ実験の小屋」。工場の排水口付近で採取された高濃度水銀を含むへドロ。黒字に白で「怨」と書かれた患者運動のシンボル、通称

「怨の旗」。水俣のバイブルといわれる小説『苦界浄土』の自筆原稿。いずれも独特のアウラをもっている。

患者の立場から水俣病事件の歴史を描く。同時に、加害者の意図的な隠蔽や不法行為を告発する。こうした明確なスタンスは、科学的、中立的な展示を謳う「水俣市立水俣病資料館」と対照的である。水俣を訪れたら、ふたつの博物館をぜひ見比べてほしい。

水俣への窓口

同じ敷地内に、NGOのオフィスや資料室、集会所、宿泊施設などがあり、センター全体が水俣への恰好の窓口になっている。現在、四名の常勤職員がおり、訪問者に対してさまざまなサービスをおこなっている。水俣病関連資料の提供、水俣のまち案内、水俣名産品の販売、体験談を語ってくださる患者の紹介など。けっして愛想がよいとはいえない人たちが、親身になって相談に乗ってくれる。

五年ほど前から、わたしは年に何回か通っている。博物館の新しい機能をここで探しているのだ。



職員による展示解説



展示の一部



ネコ実験の小屋

みんぱく 私の逸品 ファイアの羽根

標本番号 K0001722
地域 ニューシランド
受入年 1975年

民博 民族社会研究部 ピーター・マシウス

今から一〇年ほど前、ワンガヌイ地域博物館の
マオリ学芸員フラベル氏と一緒に私が収蔵庫で資
料を調べていた日のことである。ガラス蓋^{ふた}つきの小
さなケースに収められた鳥の羽根を見つけた彼は、
一目見るなり、これは極めて珍しい宝物だよといっ
て、その鳥に捧げる祈りの歌を小声で唱え始めた。
それはマオリ文化にとって重要な鳥ファイア（ホオ
ダレムクドリ）の尾羽根だった。白と黒の美しい尾
羽根が髪飾りに使われていたことは、一九世紀の
古写真や絵画にも描かれている。

ウェリントン北方の荒山にのみ生息していたファイアは、
二〇世紀初めには絶滅してしまった。ヨーロッパ式の銃を手に

してから、マオリの人びとが羽根を手に入れるのが容易になったし、

他国の博物館向け収集家たちもこの鳥をたくさん殺したからである。実

際、ファイアはだまされやすい鳥だった。ファイア、ファイアという鳴き声を人が口笛でま

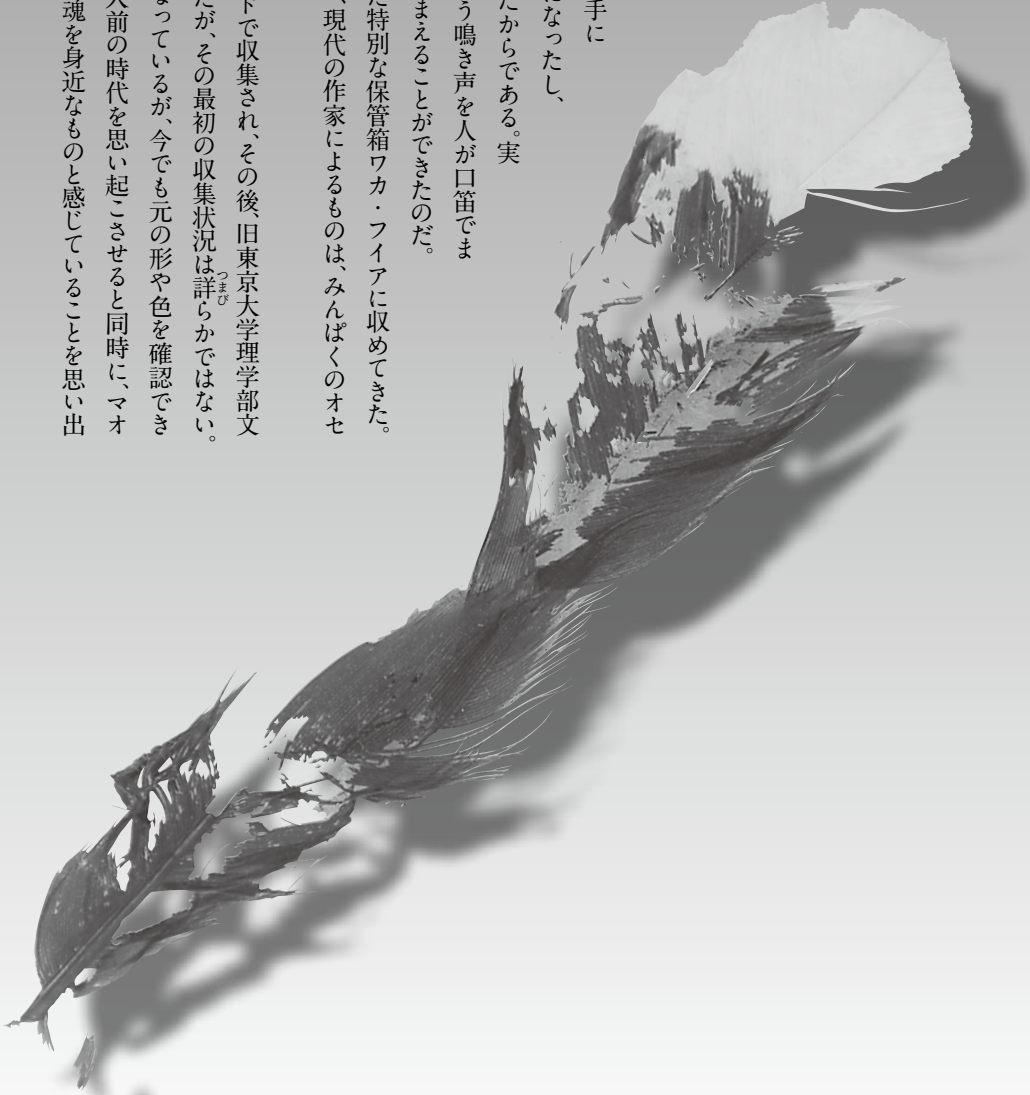
ねると、仲間と勘違いして近づいてくるファイアを容易に捕まえることができたのだ。

マオリの人びとはファイアの羽根を珍重し、彫刻を施した特別な保管箱ワカ・ファイアに収めてきた。

その後、ワカ・ファイアは宝物箱一般をさすようになったが、現代の作家によるものは、みんぱくのオセ
アニア展示で見ることができる。

収蔵庫のファイアの羽根は、一九〇四年にニュージーランドで収集され、その後、旧東京大学理学部文
化人類学教室を経て、みんぱく創設時に移管されたようだが、その最初の収集状況は詳^{つまび}らかではない。

ケース越しによく見ると、かなり劣化してポロボロになっているが、今でも元の形や色を確認でき
る。綿枕の上に眠るファイアの羽根は、失われた世界、銃導入前の時代を思い起こさせると同時に、マオ
リの人びとが生き続けていること、彼らが今でもファイアの魂を身近なものと感じていることを思い出
させてくれる。



博物館と「さわる」

こやま
しゅうぞう
小山修三
吹田市立博物館館長
民博名誉教授

博物館に人が来なくなっている。その流れを変えることはできないだろうか。じつはわたしも宝物館のような博物館が二ガテだった。宝物をケースにおさめ、禁止札をはりめぐらせて、いかにも見せてやるという雰囲気がいやだったからだ。それでも博物館に勤めているのだから、と機会があれば見せてまわった。そして、カギのひとつが、これまでタブーにしてきた展示品に「さわる」ことだと考えるようになった。そうなるまでの思考の径を振り返ってみることにしたい。

スウェーデンの博物館

はじまりは、一九七八年、ストックホルムで「視覚障がい者のための展示——バイキングの生活と文化」のコーナーをみたことだった。村の生活や戦いを描いた、素人っぽい想像図が数枚、さわってわかるように凹凸をつけてあった。発掘品はケースのなかに厳重におさめられていたと思う。それでも「さすが福祉国家スウェーデン、しかし博物館は将来ここまでやらねばならないのか」という思いが脳裏をよぎった。わたし自身まだ博物館の既成概念から抜けていなかったためか手元にはスナップ写真すらない。

アポリジニの美術館

オーストラリア・アポリジニの美術工芸品が注目され始めたのは一九七〇年代になってからだ。政府の援助を受けて各コミュニティにアートセンターがつくられ、たくさんのお美術工芸品が集積されるようになった。そのうちに、売れずじ画家の個展を都会でやろうとか、部族の歴史がわかる資料室を作ろうといった案が出てくる。ノーザンテリトリ・マニングリダの町は特に意欲的で、小さな博物館まで作り上げ

た。ところが、高温多湿な熱帯性気候に対し、空調など設備が不完全で、数年のうちにぼろぼろになった。しかし、アポリジニたちの生活は使い捨て、高価な芸術品でも神聖な儀礼具でも「モノはまた作ればいい、大切なのは精神だ」とこだわらない。博物館とは対極の考え方である。だから、政府の援助などで機運が盛り上げれば再び博物館を作るということを繰り返しているうちにそれなりの形ができてくる。

ルーブル美術館

二〇〇八年に訪れたルーブル美術館には「障がい者のための特別室」があった。古代の彫刻を小型にした精巧なレプリカが並べられてあり、インスタラクターに連れられた子どもたちがそれにさわりながら熱心に見ている。それにしても、改めて驚いたのは、ヨーロッパ美術館の監視の緩やかさだ。壁に掛けた名画の前は低いロープの柵があり、監視員がいるのだが、基本的には露出展示である。これは観客の文化レベルの差なのだろうか。絶対さわるなという日本の博物館のあり方はいいつつ、どこからでたのだろう、と不思議に思った。

みんなとすいはく

二〇〇六年、みんなくで廣瀬浩二郎さんが中心となった企画展「さわる文字、さわる世界」が開かれた。このとき国際シンポジウムも開催され、今世界で進行している誰にでもわかる博物館ユニバーサル・ミュージアムの状況がよくわかった。メトロポリタン美術館ではエジプトの石造彫刻に直接さわるところまで踏み切っていたのに驚いた。コンピュータの駆使もめざましかった。

同じ年、吹田市立博物館でも実験展として「さわる 五感の挑戦」をはじめた。仏像のレプリカのほか、楽器、おもちゃなどを消耗品として購入してならべ、自由にさわってもらった。その後、広瀬さんと一緒に「誰でも楽しめる博物館」の共同研究をたち上げた。ここでも、さわらせるべきかどうかについての議論が沸騰している。みんなくを開館したとき梅棹館長は「さわる」のは当たり前だと言っていた。その精神を受け継ぎ、率先して「守る」より「開く」、つまりさわらせる方向へリードして、博物館の将来のあり方に一石を投じてほしいと思う。



ルーブル美術館。
障がい者のための特別室

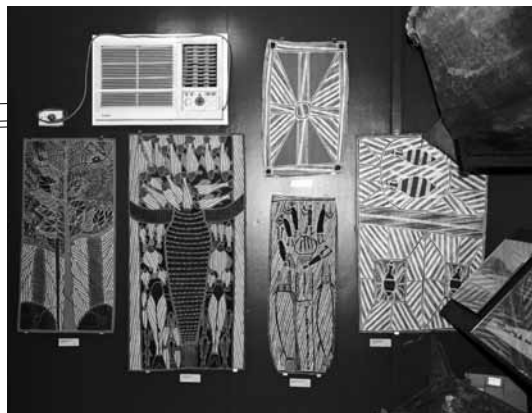
吹田市立博物館での実験展
「さわる 五感の挑戦」にて。
梅棹さんが来館したとき
2006年10月(撮影・藤田京子)



イルカラの博物館。劣化したものも多い
1980年



吹田市立博物館「さわる 五感の挑戦
Part IV」の関連イベント、香道の体験
講座 2009年9月(撮影・藤田京子)



マニングリダの博物館。
エアコンはあるがよく止まる
1988年(撮影・久保正敏)

新宿区高田馬場にあるニューコムの事務所を訪れて筆者が目にしたのは、多文化の縮図というべき光景だった。アジアを中心に、一四の国・地域から来日したスタッフが、習慣や文化の違いを乗り越えて、新聞制作という共通目的のもとに働いている。おもに在日外国人が、在日外国人のために情報を発信するエスニック・メディアである。

代表取締役社長の藍淑人(あいつとん)さんは、台湾出身。留学生として来日し、一九九一年にニューコムを設立、「新交流時報」(中国語と日本語の新聞)を創刊した。そのきっかけは、日本で生活するために必要となる生活基本情報を、同胞に母語で送り届けたかったからだ。その後、ニューコムは立て続けに新聞を手掛けていく。タイ語新聞「スーマイ・タイムズ」(一九九二年)、マレー語新聞「マレーシア・タイムズ」(一九九四年)、インドネシア語新聞「メディア・ヌアンサ・インドネシア」(一九九六年)、ミャンマー語新聞「シユウエ・バマー」(一九九六年)、中国語新聞「台湾報」(一九九八年に「新交流時報」から名称変更)、フィリピン語(タグリッシュ)新聞「カイビガン」(一九九九年復刊)、ベトナム語新聞「ジャウ・リュウ」(二〇〇四年)、ヒンディー語新聞「マイトレイ・インディア」(二〇〇八年)、シンハラ語新聞「ジャヤスリ」(二〇〇九年)である。各新聞には日本語記事も設けられ、日本人読者も読める構成になっている。その多彩な言語での活動は、驚くばかりである。

ているのは、病氣や怪我をしたときに、どこに電話をすればよいかという緊急情報です」と、同紙の制作を担当する小池昌さんは語る。こうしたサポート情報を母語で送り届けることによって、特に孤立感を抱きやすい来日当初の在日外国人に、安心感を与えることにもなっている。

もうひとつ特徴的なのは、日本社会に関するタグリッシュによる記事が充実していることだ。日本社会で暮らしていくために必要な社会情報である。そして興味深いことに、フィリピンの歴史、文化、地誌を紹介する記事も多い。それもタグリッシュで書かれており、じつはフィリピン人読者を対象にした記事なのである。小池さんによると、在日フィリピン人女性のなかには、もともと若いころにエンターテイナーとして日本に移り住んだために、フィリピン文化について深く学ぶ機会をもてなかった人もいるという。たとえば、そうした人びとが日本人と結婚し、子どもをもったときに、自分の文化を説明し、継承させていく必要が生じる。出身国のことを改めて知ってほしいという願いから、在日フィリピン人読者にも、フィリピンの文化を紹介する記事がうまれたのである。

「カイビガン」には、フィリピンの現状を多面的に紹介する日本語記事もある。それはおもに日本人読者を対象としている。フィリピン人女性と結婚した日本人男性が、妻の出身国であるフィリピンについて、偏見を交えず、より深く知ることができるように、という目的である。こうした記事を契機に、国際結婚家庭のなかで、お互いの文化について思ってもみなかった見方が生まれ、あらた

多文化を
ささえる
人びと

多文化の街の 多言語メディア——ニューコム

外国籍住民の比率が1割を超えた東京都新宿区。多民族化しはじめたその街に、多言語のエスニック・メディアが活動を繰り広げている。9つの言語で新聞を発行するニューコムである。その活動から見えてくるのは、多文化時代のあらたなコミュニケーションの在り方だ。

なかの かつひこ
中野 克彦 立命館大学非常勤講師

エスニック・メディアの現状とニューコム

ニューコムが活動を始めた一九九〇年代は、日本国内でエスニック・メディアが本格的に成長した時期であった。その背景には、国際電話業界の成長がある。在日外国人が急増した当時、郷里の家族に国際電話をかける在日外国人を対象に、国際電話会社が多くの特典を出したが、その後のエスニック・メディアの発展に繋がった。しかし現在、国際電話市場はかつてと比べてかならずしも好調とはいえない。広告の減少によって、エスニック・メディア業界にも、深刻な影響があらわれている。にもかかわらず、ニューコムの取り組みは意欲的だ。将来的にはブラジル系メディアを発行する構想もあるという。「確かにビジネスとして考えれば、メディアの運営は大変です。しかしそれでもこの事業を続けるのは、何より面白いから」と藍さんは語る。「多言語の新聞を通じて、日本人と外国人の心の交流とあらたなコミュニケーションを促したいのです」。

フィリピン系新聞「カイビガン」の例

それでは、ニューコムの新聞はどのような役割を担っているのか。フィリピン系新聞「カイビガン」を例にみてみよう。ちなみに同紙では、在日フィリピン人にとって読みやすい「タグリッシュ」(英語とタガログ語の交じった言語)と日本語が用いられている。

まず特徴的なのは、病院や公的相談機関の連絡先の一覧表が、毎号かならず掲載されていること。「日本にやってきた当初の外国人が何より必要とし

なコミュニケーションが活性化されるかもしれない。

異なる文化を情報でつなぐ

「カイビガン」のように、ニューコムのエスニック・メディアはさまざまな役割をもち合わせているといえる。まず、在日外国人に生活情報を提供する役割。そして、在日外国人と日本人読者の双方に、多言語で社会情報を提供することにより、コミュニケーションを促す役割。単に在日外国人に情報を伝達するだけではない。それ以上の目的、つまり異文化への偏見を超えて「情報によって異なる文化をつなぐ」という明確な問題意識のもとに、紙面が構成されているのである。多文化の街の多言語メディア。その活動は、多民族化しつつある日本の将来の課題を先取りしているのかもしれない。

「カイビガン」の表紙



ニューコムが手掛けるエスニック・メディア。9種類の新聞が発行されている



ニューコム(出版部)の風景。スタッフの文化的背景は多様だ(提供・小池 昌)



ニューコムの事務所がある高田馬場周辺の街頭。エスニックレストランの看板がならぶ

イタリアの「熱い秋」

日ごと太陽が遠のき、冬の足音が急速にしのびよるイタリアの秋。田園地帯で、恵みを祝う収穫祭がにぎやかに催される一方、都市部では、もうひとつの風物詩デモやストライキが最盛期をむかえる。この抗議活動が「熱い秋」と表現される所以は……

都会暮らしと収穫祭

秋といえば、イタリアでも収穫の季節である。九月半ばを過ぎるとイタリア中はブドウの収穫とワイン作りで忙しくなる。都会暮らしの人も、週末、親戚や友人のブドウ園を手伝いに行ったり、キノコや栗などを採りに出かけたりする。最近では、これら秋の味覚に便乗したブドウ祭りやキノコ祭りなどの収穫祭も、楽しみのひとつになってきた。もちろん、これまでも収穫祭はあったが、近年、観光による地域振興という思惑のもと、各地でさまざまな収穫祭が競うように増えているからである。この時期、いまだ夏のバカンス気分が抜けないせいもあってか、週末ごとに近隣の町々を訪れ、田舎生活の一端に触れながら皆で飲食を楽しむという習慣が定着しつつある。

もうひとつの祭り

ところで、田舎から都市部に目を転ずると、イタリアの秋のもうひとつの風物詩は、デモやストライキである。日本では、「春闘」ということばがあるように、ストライキなどは春というイメージがあるだろう。しかしイタリアでは、次年度予算案が議論される秋が、抗議活動の最盛期になる。たしかにイタリアは一年を通してストなどが頻繁におこなわれる国だが、秋は格別なのだ。その熱気ゆえ、「熱い秋」という表現もなされる。

策が含まれている。したがって、それぞれの問題の当事者が、政府案をめぐって意見や抗議の声を上げるべく、デモやストライキを計画するのである。さらに彼らの抗議は、プラカードを掲げてシユプレヒコールを上げるだけでなく、多分に娯楽的な要素があることも印象的だ。たとえばデモ行進中、彼らは歌ったり踊ったり、仮装したり、自分たちで作った政治家たちのハリボテ人形をもち出したりする。デモのために周辺各地から都市に集まり、皆でワイワイ盛り上がりながら行進をしている様子は、一種の祭りのようにも見える。

最大の「被害者」は

とはいえ、こうしたデモやストライキは、九月半ば以降は小規模なも

のも含めるとほぼ毎日のおこなわれ、人びとの生活、特に交通事情に支障をきたす。人びとの足を直撃する交通機関のストライキだけでなく、デモ行進も交通規制を伴うからである。大規模なデモは、たいていもつとも交通量の少ない日曜日の昼過ぎに実施されるが、その間は幹線道路が車両通行禁止になる。小規模なデモの場合は平日におこなわれ、通勤通学などに多少なりとも影響がある。交通規制やバス路線変更の情報には二・三日前には新聞等で公表されるものの、周知は難しい。このため、頻繁な「突然の」交通規制に、もともと評判の悪いイタリアの交通事情はさらに混乱する。そんななか、最大の「被害者」は観光でやってきた外国人だろう。わたしも、バス停でいくらまってもバスが来なかった



10月の某日曜日午後、ローマ中心街の幹線道路いっぱいにはひろがってデモ行進をする人びと(2009年)

り、突然途中でバスを降ろされたりして、右往左往している観光客に何人も出くわした。

現代史の要

その一方で、イタリア人自身は、平日頃はそれほど忍耐強くないのに、この混乱はある程度受け入れているように見えるのは、ちょっと驚きだった。たしかに彼らは文句を言う。デモによる交通規制に引掛かったバスの車内では、運転手や乗客たちが、デモに対する不満を声高に口にして光景もしばしば見かける。しかし、だからといってデモやストライキの規制を強化したり無くそうとしたりする方向には進まない。

その理由としては、彼らがこの状況に慣れて諦めているせいもあるだろうが、もうひとつ、こうした抗議活動が、イタリアの重要な歴史的記憶に密接につながっているからかもしれない。じつは「熱い秋」という表現も、一九六九年秋、トリノのファイアット工場での大規模ストライキを発端とする労働運動・学生運動を指し示す歴史的なことばである。前年の一九六八年フランスで起きた学生や労働者たちの運動はヨーロッパ中に（さらには日本にも）飛び火したが、イタリアでの運動は激しかっただけでなく、その後他の

国々以上に継続した。現在も、内実は大きく変容したにせよ系譜は途切れていない。「熱い秋」は、イタリア現代史の要のひとつであるとともに、彼ら・彼女ら一人一人の人生や考え方に深く根付いているともいえるだろう。わたしも、ごく普通の人たちが「熱い秋」の思い出を熱く語ったり、自分の子どもや孫たちがデモの準備をしていると「わたしたちもむかし、プラカードを作ったね」と笑いながら眺めたりしている場面にも何度か出くわしている。

そしてイタリア人は、一般的に政治的な話題が好きで、自分たちの意見を表明し合うことを好む傾向があることもつけ加えておこう。近現代のイタリアを代表する思想家の一人グラムシは、「わが国では、叫んだり、議論に花を咲かせたり、自慢話をしたりする場として、広場が、他国に比較して著しく家庭より重要なのです」と述べている。広場、すなわち、外に出て皆で政治を論じ、デモなどの抗議活動をするのは、イタリアでは決して特別な行為ではなく、むしろ日常生活の一部であり延長線上なのである。とするならばイタリアでは、そうした風土と歴史的記憶に支えられ、今年も「熱い秋」がやってきているに違いない。もちろん、若干は楽しみのひとつとして……。

「出張」にでかける 地方の神さま

たけむら よしあき
竹村 嘉晃
民博 外来研究員

ココ椰子の木々が生い茂るインド南西部のケーララ州。緑豊かなこの地域の北に位置するカンヌール県で、わたしは土着の神霊を祀る儀礼について、ここ数年来調査を続けている。最近、その儀礼の担い手たちが依頼を受けて、ムンバイやチェンナイといった州外の都市部へ出かけていく姿をわたしは何度も目にするようになった。



さまざまな画像画が売られている日用品店の店先

祝福と託宣を与える土着の神さま
地元のヒンドゥー教徒たちのあいだでは、ムッタツパンとよばれる土着の英雄神とその儀礼が人気を集めている。市街を散策すると、バスやオートリキシャのフロントガラス、レストランや日用品店の店先などに、ムッタツパン神のご利益にあやかろうと画像画やステッカーを祀っているのが目にとまる。ムッタツパンの讃歌が入ったカセットテープやCDなども広く出回り、ムッタツパンの巡礼地として有名な寺院は、毎日、州内外から訪れる多くの参拝者で賑わっている。

ムッタツパンは、観念的なヒンドゥーの神さまとは異なり、指定カースト（不可触民）の男性の身体を介して、人びとの前に姿をあらわす。そして、参拝者一人ひとりの悩みに耳を傾け、かれらに祝福と託宣を与える。参拝者のなかには、ムッタツパンのことばに感極まって涙を流す者や、自らが抱える問題を言い当てられ、呆然とする者がいる。「ムッタツパンに尋ねれば、必ず答えが返ってくる」



化粧を終え装束を身につけるムッタツパンの担い手

と地元の人びとが語るように、ムッタツパン信仰の人気の秘密は、ムッタツパンが語る託宣の確さとその神秘性にあるようだ。

この土着の神さま、じつは酒好きとしても知られている。ムッタツパンの儀礼では、バラモン（最高位のカースト）が司祭を務めるヒンドゥー寺院では見られない、ヤシ酒や干し魚が供物として捧げられる。最近では、ブランドーやラム酒のほか、中東沿岸諸国からの出稼ぎ帰国者たちがもたらす外国産ウイスキーも見かけるようになった。儀礼の際、

ムッタツパンはそれらの酒瓶を手にとると、数名の男性参拝者を呼びつけて、プラサーダム（お下がり）という名目で彼らに酒をふるまい、冗談まじりに酒を酌み交わす。

出稼ぎ移民による送金と信仰の隆盛

古老たちの話では、むかし、ムッタツパンの儀礼は祠で年に一、二回程度しかおこなわれなかったという。しかしながら、わたしがフィールドに通い始めてからここ数年までのあいだに、毎週定期的に儀礼をおこなう祠が増え、個人宅での儀礼奉納も活発におこなわれるようになってきている。その理由を古老たちに尋ねると、「ガルフの金だよ」と彼らは口をそろえる。

産業基盤が乏しいケーララでは、「親族内に必ず一人はいる」と言われるほど、仕事を求めて州外や中東沿岸諸国（ガルフ）へ出稼ぎに出かける者が多い。そして、彼らからの送金で生活を営む家族は、そのお金を住宅の新築や



儀礼の場に姿をあらわすムッタツパン神

土地の購入、個人消費財などに費やしている。近年、こうした送金をもとに儀礼奉納をおこなう人びとが増えている。新築祝いをはじめ、結婚、出産、試験合格、就職などの祈願成就のほか、親族関係や仕事上の問題といった日頃抱えるさまざまな悩みを解決するため、人びとはムッタツパンに託宣を求める。ムッタツパンの担い手たちのもとには儀礼の依頼が殺到し、それらのなかにはローカルな文脈だけでなく、州内外からのものも含まれている。

地方の神さまが大会にあらわれる

デリーやムンバイ、チェンナイといった大都市のほか、他州で暮らすケーララ出身の移住者たちのあいだでは、最近、コミュニティの催しとしてムッタツパン儀礼がおこなわれるようになった。ムッタツパンの人気は州外でも高く、祠を建立する動きもいくつかみられるほどである。

急速な経済成長を続ける現代インド社会では、都市部を中心に中間層の生活が急速に変化している。消費社会が広がる一方、共同体的なつながりはますます希薄になっていくなかで、ムッタツパン儀礼は、個人の悩みを解決するだけでなく、ケーララ出身者としてのつながりやアイデンティティを強める働きをもっているようである。

ムッタツパンという地方の神さまは、ケーララ人のニーズに応え、ローカルな文脈だけでなく、州内外のさまざまな場にも「出張」



ケーララ出身の移住者コミュニティが主催する儀礼の様子（ムンバイ マハラージェラ州）

している。こうした動きは、それまで儀礼の報酬だけでは生計を営むことが困難であった、担い手たちの生活環境や社会的な状況にも大きな変化をもたらしている。

二〇〇九年、久しぶりにカンヌールを再訪した際、そこには中東のドゥバイでおこなった儀礼の様子を自慢げに語る、担い手の友人の姿があった。ムッタツパンは、とうとう海外にまで「出張」するようになったのだ。ケーララの神さまの今後の動向がますます気になってきた。

10月

みんなくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■時間 14時30分から15時30分(予定)

■展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館(みんなく)の研究者が来館された皆様の前に登場します!
「研究について」「調査している地域(国)の最新情報」「展示資料について」
などなど、話題や内容は千差万別!
どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしております。

3日
(11月11日)

話者:川口幸也(文化資源研究センター准教授)
話題:【特別展開連】
彫刻家エル・アナツイが語るアフリカの歴史と行く末
場所:特別展示館

10日
(11月11日)

話者:白川千尋(先端人類科学研究部准教授)
話題:特別な日の過ごし方
場所:オセアニア展示場

17日
(11月11日)

話者:塚田誠之(先端人類科学研究部教授)
話題:【企画展「アジアの境界を越えて」関連】
境界を越えて——ベトナムの事例から
場所:企画展示場A

24日
(11月11日)

話者:鈴木七美(先端人類科学研究部教授)
話題:北欧スウェーデンのウェルビーイングとケアの課題
場所:本館展示場内ナビひろば

31日
(11月11日)

話者:信田敏宏(研究戦略センター准教授)
話題:母系社会に生きる女と男
場所:本館展示場内ナビひろば

「梅棹忠夫先生をしのぶ会」開催のお知らせ

日時:平成22年10月20日(水)午後1時30分~4時30分

場所:国立民族学博物館エントランスホール

さる7月3日に逝去された梅棹忠夫先生をしのぶ会を開催します。ご遺族のご希望もあり、多くの方が参列できる簡素な「しのぶ会」とし、式典は催さずに献花によって先生への思いをあらわすことといたします。湯茶のみにて飲食等は用意いたしません。また、ご供花・ご香典等はお断りさせていただきます。

当日は、梅棹忠夫先生が調査研究に赴かれた地域の展示場等に、先生のお写真を展示し、講堂とセミナー室では、民博創設以降の式典、ご講演や対談での先生のお姿を映像で映写する予定です。当日は休館日ですが、本館展示場をご覧ください。

なお、当日午後1時から5時まで、大阪モノレール「万博記念公園駅」と国立民族学博物館のあいだにシャトルバスを運行いたしますのでご利用ください。
〔梅棹忠夫先生をしのぶ会〕実行委員長 田村克己

編集後記

この夏に逝かれた梅棹さんの思いを振り返る特集を組むにあたり、梅棹さんの生き生きとした表情をとらえた写真を通して、民博の歴史をたどろうと考えた。しかし、そうした写真を探すのには結構苦勞した。というのも、創設10周年、開館30周年などの節目には、他の文書資料とともに過去の記録写真の整理が進むが、中間期に定期的に整理・保存をおこなう体制がなかったからである。

今回、関係各部署や梅棹資料室と協力しながら、梅棹さんの姿をたどることとなったが、それは、民博に遅れてきた世代であるわたしにとって、民博創設前後のころの熱気や民博に対する期待の大きさを、あらためて知る機会であった。それと同時に、梅棹さんのことばの重みや学識、研究経営センス、そして今や喧しい納税者への還元視点など、その先見性をあらためて噛みしめる旅となった。もっともっといろいろなお話を伺っておけばよかったのに、と今更ながら後悔の思いが深まるばかりである。合掌。(久保正敏)

次号の予告

特集
考腹論

月刊みんなく 2010年10月号

第34巻第10号通巻第397号 2010年10月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 西尾哲夫

編集委員 久保正敏(編集長) 朝倉敏夫 榎永真佐夫
庄司博史 中牧弘允 山中由里子

編集アドバイザー 山内直樹

デザイン 宮谷一孝

制作・協力 財団法人千里文化財団

印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
お願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

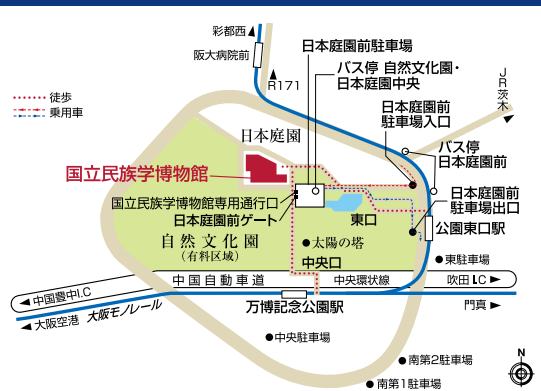
交通案内

●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分

●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分(茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。)

●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。

●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。



みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

